

ぼらのたね OITA

発行所
 社会福祉法人 大分県社会福祉協議会
 大分県ボランティア・市民活動センター
 〒870-0907 大分市大津町2丁目1番41号
 関係各団体
 TEL(097)558-3373 FAX(097)558-1296
 URL http://www.oitavoc.jp
 E-mail oitavoc@oitavoc.jp

2008 MAY
 No.10

知っていますか? カラーリボン運動



ピンクリボン運動

ピンクリボンは、乳がんの撲滅、検診の早期受診を啓発・推進するために行われる世界規模のキャンペーン、もしくはそのシンボルの事です。日本人女性のうち、乳がんを発症する割合は約25人に1人とされており、また、乳がんで死亡する女性の数は年間約1万人弱とされ、そのキャンペーンは年々増すことに拡大しています。

日本でのピンクリボン運動が一般的に認知されるようになったのは、2000年代に入ってからです。2000年10月に日本最大の乳がん患者支援団体である「あけぼの会」が東京タワーをピンク色にライトアップしたことがきっかけです。その運動の規模は年を追うごとに急拡大しており、アストラセネカ、アテニア化粧品、エイボン・プロダクツ、東京海上日動あんしん生命、ワコーなど、協賛する企業、市民団体は多数存在しています。また、Yahoo!JAPAN、asahi.comといった日本を代表するポータルサイト、ニュースサイトで広くピンクリボン運動が紹介されています。

東京都庁舎、レインボーブリッジ、東京タワー、表参道ヒルズ、神戸ポートタワー、明石海峡大橋などはピンク色にライトアップ(またはピンク色の電球に交換)する事で、大勢の人へ視覚という形でピンクリボン運動の認知度向上へ貢献しています。



ピンクリボン運動の活動組織では、1年に1度、マンモグラフィー検診(乳癌、乳房専用のレントゲン検診)を受けることを奨励しています。



イエローリボン運動

イエローリボンには、「障害者自立支援法」へのイエローカード(警告)という意味と、幸せの黄色いハンカチのイメージから「障害のある人びとの、その人らしい自立と社会参加をめざす」という2つの願いを込められており、障害のある人々の、その人らしい自立と社会参加をめざすためのシンボルにと考えられています。

障害のある人への、一人ひとりの理解と支援の輪が全国に広がる事で、どんなに重い障害を持っていても、障害のある人々、一人ひとりのその人らしい自立と社会参加が保障され、人としての尊厳が守られ、住み慣れた町で幸せに暮らしていくことが出来ればと思います。

障害のある人々の自立と社会参加をめざし、また多くの国民の皆さまにこの取り組みに連帯していただくことを願いつつ、「イエローリボン運動」を全国各地に広めていきましょう!



ホワイトバンド運動

ホワイトバンドには、「世界のまずしさを克服することができる。この世界にはそのための資源や情報がすでにある。必要なのは「貧困を世界の優先課題にする」という意志をもつこと」という意味が込められており、G-CAP(ジー・キャップ:Global Call to Action Against Povertyの略)は、2005年に世界中の多くの人たちがホワイトバンドをつけてその意志を世界に示すことで、貧困問題の解消に積極的に取り組むように各国政府や国際機関に訴える大規模なキャンペーンを始めました。でもこれだけでは充分ではありません。ひとりでも多くの人に貧困の現実を知ってもらう活動、貧困を無くしていくための具体的な政策への提言も、まだ始まったばかりです。

巨知識 ピンクリボン運動とは?

エイズ予防を呼びかける「赤のリボン」、北朝鮮による日本人拉致被害者救出を訴える「青いリボン」が広く知られています。「ピンクリボン運動」は乳がんの早期発見、早期治療の重要性を訴える運動です。
 乳がんを患う人が8人にひとりといわれているアメリカで、若くして亡くなった女性の母親が、同じ悲しみを二度と繰り返したくないとの思いから、2人の幼児と一緒にピンクリボンをつくり「乳がんで命を落とさないために、早期発見、早期診断、早期治療をしましょう」とのメッセージを託したのが始まりです。
 世界的な運動で、日本でも2000年当初より始まり、市民・企業・医療従事者・患者さんなど様々な立場での「ピンクリボン運動」が年々始まっています。

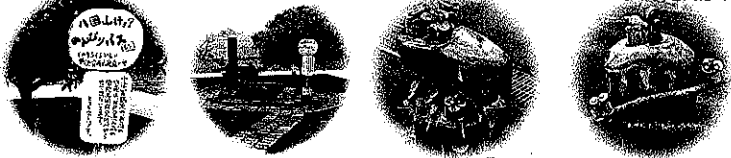
他にもいろいろな種類のカラー運動があります

- レッドリボン運動 エイズ患者に対する理解と支援の象徴を表す運動
- ブルーリボン運動 【アメリカ】表現の自由の保護を訴えるキャンペーン
【日本】北朝鮮による日本人拉致被害者の救出を訴える運動
【カナダ】受動喫煙防止運動
- ブルークローバーキャンペーン 前立腺がんの早期発見・治療を訴えるキャンペーン。すでにアメリカではブルーリボン運動の一つに、前立腺がんへの理解を深めるための運動があるが、日本では上記のブルーリボンがすでにあったためにクローバーを用いている。

行って来ました! 大分県ボランティア・市民活動センターでは、毎年「企業・団体の社会貢献ボランティア活動研修会」を開催しております。19年度も開催したところ、たくさんの方々

が参加してくださいました。その中に、中津胃腸病院業務部長の高倉さん、医療福祉相談室の松尾さん、広報室の松尾さんの3名がいらっしゃいました。その素晴らしい活動を見つけた当センター小野と、村野とで取材に行っていました。
 話を伺って、さまざまな取組の中でも素晴らしいと思ったのが、「豊前市上川底の「もみじ学舎」内のNPO法人「森の学校共同作業所」に委託して、病院駐車場の花壇や中庭の管理、周辺の草刈りをお願いしていることです。同作業所は、精神障害などがある約15名が木工等の就労訓練を通じ社会復帰を目指しているところだそうです。

写真は、作業所の利用者達が日頃のお礼をこめて作成したオブジェ。彼らが、通・入院患者の気持ちを和ませようと贈ったその作品は、本当に心が温かくなる素敵な木製のオブジェでした。また、中庭は「とどろきのバス停」をイメージして作成したそうで、作業所利用者が楽しく作業している様子が目に浮かぶような、かわいい中庭でした。
 彼らに活動の楽しさや、社会就労の機会を提供して下さっている中津胃腸病院さんには、地域に根ざした病院でありたいとの思いが強く、どのようにしたらお役に立てるのか?を常に模索して下さっていることに敬服いたしました。みなさんも、一度木製オブジェに会いに行ってみませんか?



ボラ甘のじぼん

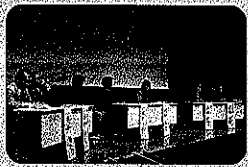
ボランティアさんいつもありがとうございます 収集

使用済みプリペイドカード、使用済み切手、書き損じハガキの収集等にご協力いただいた皆さんをご紹介します。(敬称略)

- 手話サークル はぐるま(夜の部)
- (社)日本オストミー協会
- 大分県聴覚障害者協会
- 大分県介護研修センター
- 大分県老人クラブ連合会
- 大分県障害者社会参加推進センター
- 大分県社会福祉事業団

情報誌「ぼらのたね」では、読者のみなさんからのご意見・ご感想、情報の提供などをお待ちしています。おたより・メールは「大分県ボランティア・市民活動センターぼらのたね係」までお送りください。

あとがき
 はじめまして! 4月より大分県ボランティア・市民活動センターでお世話になることになりました鳥居理恵と申します。ボランティアコーディネーターとして、一から勉強している毎日です。
 また、次号からの情報誌「ぼらのたね」も担当させていただきます。手にしていただいた方に楽しんで読んでもらえる紙面作りができればいいな、と思っています。それには、みなさまからの情報やご意見・ご感想が貴重なものとなります。一方通行の情報発信にならないように、みんなで情報を持ち寄り情報交換が少しでもできたらいいな、と考えています。どうぞよろしく願います。
 追伸、ホームページも担当しています。こちらも、どうぞ可愛がってあげてくださいね。



それぞれが、自己紹介を兼ねて日頃の取組や経験、行政としての立場からの意見を述べ、意見交換をしました。会場からの意見などもみなさんと共有し、このシンポジウムを通して見えてきた取組を「防災体制づくりは地域づくり、地域社会の再生にむけてみんなで力を合わせていきたい。」とコーディネーターの徳田さんがまとめてくださいました。

開会挨拶

「2002年から「地域でともに生きる」をテーマに福祉フォーラムを開催してきました。今年は、頻りに発生している群発地震により、災害の怖さや避難所の不備を実感し、障がい者などの防災対策が緊急の課題であると考え、シンポジウムを通して防災対策を考えていきます。」と実行委員長の大林さんは開会挨拶をされました。



来賓挨拶

浜田別府市長には、「災害時要援護者の支援制度を関係機関等と連携し、地域で安心して暮らせるまちづくりをしっかりと進めて行きたい。」との挨拶をいただきました。

基調提起

在宅障害者支援ネットワークの徳田代表からは、「昨年4月に火災でお亡くなりになった五十嵐さんの事故をきっかけに今回のテーマの取組をはじめました。災害が発生したときに障がいがある方を守るという体制ができていなければ、障がい者にやさしいまちづくりも、障がい者とともに生きるまちづくりもできないということを痛感しました。本日活発な意見交換をし、明日から行動できるようにしたい。」との基調提起がありました。

被災現場の報告と提言

今回のフォーラムは「震災がつなぐ全国ネットワーク」(以下震つな <http://npo-ai-chi.or.jp/shintuna/>)との共催で開催しました。現地支援活動経験が豊富な代表の栗田嶋之氏に被災現場の状況や活動から見えてきたことを伝えていただきました。参加者の心を締め付けたのは、建物の下敷きになった息子さんを、助け出そうとしているところに火災が発生し、助け出せなかったお父さんに事情も知らずリポーターが声をかけ、状況を聞いて絶句している様子。息子さんの最後の言葉は、「お父さん、逃げる！」災害現場ではメディアで報道されない悲劇があり、それを目の当たりにしてきた栗田代表は「今日はたくさん障がいがある方もお見えですが、ぜひ声を上げていただきたい。自分たちはこれが必要だ、こういうことをしたい、そして自分なりに動く、地域でできることをやる、そして行政が考えなければならないことは考え取り組んでいくことが不可欠です。」と、これまでの被災地での教訓を活かして、地域づくり、災害対策に取り組んで欲しいとの強いお言葉でした。

現状報告—当事者・施設・自治体の今と課題

在宅障害者支援ネットワークの小野事務局長より、大分県内の災害時要援護者対策に関する自治体調査報告がありました。

そして、当事者の声としてお二人が届けられました。松浦さんは、「ヘルパーを利用してアパートで一人暮らしをしていますが、災害があったときにヘルパーさんが被災していることもあるので、誰が私を救援してくれるのか？また、重度障がい者がそれぞれにあった避難所を見つけることができるのか心配だ。」と語っているそうです。

福田さんは、火災でお亡くなりになった五十嵐さんと同じマンションにお一人でお住まいになっているそうで、火災のあといろいろな報道で心を痛めたそうです。「僕は、施設に保護してもらった方がいいのでしょうか？僕は地域に暮らしたいです。社会で仕事をしながら頑張らせてあげたいです。」

福田さんのこの言葉は当たり前なことなのに、そうではない社会が見えてきます。すべての人が、自分のこととして考えていかなければならないと思います。

別府大学の藤藤先生からは、「防災は地域の全員が関わっている問題であり、いろいろな人が協力して具体的に取り組むことが必要です。一緒に取り組んできた五十嵐さんが亡くなって、防災を真剣に考えていこうと始まったこの一年でしたが、今後も五十嵐さんを忘れず、具体的な行動を起こし、行動を通じて意識をつないでいくための日を制定して、きっかけ作りをしていくことも必要なのではないかと考えます。」と別府大学生達が調査してくれた、障がい者・小規模施設の状況と併せて防災の現状と課題の報告をいただきました。



パネリストディスカッション (上部写真と内容掲載)

- 【コーディネーター】徳田靖之氏(在宅障害者支援ネットワーク代表)
 【パネリスト】西田幸生氏(別府市身体障害者福祉団体協議会会長)「障がいの種類によって異なる支援」
 米倉 仁氏(NPO法人自立支援センターおおい代表)「安心して地域で暮らせる住宅」
 村野淳子氏(大分県社会福祉協議会)「防災の仕組み」と「地域の日常」の取組が大切
 石井幹将氏(当時別府市障害福祉課長)「防災対策の必要性十分認識」
 甲斐敬造氏(当時別府市環境安全課長)「昨年6月はバニック、10月は教訓生かす」

閉会挨拶

NPO法人自立支援センターおおいの河野さんは、「今日が始まりということで、本日参加した人が地域のまわりの人に話しかけていくことをお願いし、この福祉フォーラムも取組を続けたいと思います。」との話しと参加者へのお礼を述べて終了しました。

参加者アンケートまとめ (参加者アンケートは59人の方から回答をいただきました。)

回答者は、ボランティア・福祉関係者・障がい者・行政・家族・自治委員・民生委員など幅広く、様々な立場から防災に関心を持っている方が参加したことがわかります。

● 取り組みの参考になりましたか？
 このフォーラムが防災の参考になったかどうかについては、55名(93.2%)の方が参考になったと回答しています。

どのような点が参考になりましたか？

- いざというときのために明日から行動に移すという気持ちになった(自治委員)
- 「行政の限界」「住民の行政まかせ」、要援護者対策は「名簿づくり」ではなく「地域づくり」であるという栗田氏の言葉が印象に残っている(行政)
- 要援護者を事前に把握し、これらの人にどう情報発信していけるか。災害発生時の対応策(防災マップ、防災マニュアル)(福祉関係者)
- 障がいを持っている方も含めて、地域の人が支えあうことが重要であることをあらためて考えることができた(患者団体)
- 行政・市民、特に障がい者のまわりに在住する近隣の人々の日常の意思疎通を図っていくことが重要であるということ。では自分はどう対応するか？(学生)
- それぞれのご報告、とても貴重な提言として受けとめました。「障がい者の防災を考える」ことは、私たち一人一人の命や暮らしを考え直し、地域について深く考えることだとあらためて気づかされました(大学教員)
- 宇佐市で進めていく一人として、何をすべきかとても参考になりました(民生委員)
- シンポジウムでのパネリストの方々の発表などが参考になった(家族)

他にも色々な意見や感想をいただきました。

- 災害時、混沌とした中で、弱い立場の人々に一番しわ寄せが来るのではないかと心配です。私の子供の場合、薬がないと生きていけないので、避難できたとしても、薬が手に入らなくなれば、どうなるのだろうかと思うと不安でした。日頃から災害時の対策を当事者が考え、対応していくこと、協力が必要なときは外に向けて訴えていくことは大切なことと思います(患者団体)
- 忘れた頃にやってくる災害、何もしていない毎日の生活で手一杯の暮らしの中で、「災害」の時のことまで及んでいないのが現実。国の税金を災害時の対策に回してもらいたい。市は災害の時に何をやるのか、形だけにとられていないか？市をあげて大きな災害を想定し、訓練を(障がい者等も含めて)年に一回は日を決めて行ってもらいたい。(自治委員)
- 滞在時間が長い(住宅)の耐震化が重要と考えます。戸建て住宅の40%以上(全国レベル)が耐震性に問題があると言われています。別府の場合は、そのパーセントはもっと高いと思われます。耐震補強は遅々として進んでいません。障がい者居住の住宅を優先的に補強(家具留めを含む)を進める仕組みが重要と考えます。防災は障がい者だけの問題ではありません。障害者、健常者ひっくるめた防災を考えるべきだと考えます(大学教員)
- ①要援護者対策の必要性について、市民の理解・コンセンサスととも多くの支援者の確保が必要
 ②現場での支援は結局地域のネットワークに頼るしかない
 ③行政はこのネットワークが機能するシステムづくりに力を入れる必要がある(地域まかせでもダメ)
 ④現場に行き、障がい者の生の声を聞き、防災対策を考える必要がある
 ⑤今後、行政が責任を持って支援体制の整備に取り組む必要がある(行政)
- 普段生活している中で、防災について考えることがないので、今日のフォーラムはとてもいい機会になりました。まずは自分のできる小さなことから始めるのが大切だと思いました。(障がい者)



取組をはじめたばかりですが、みなさんもご自身のこととして、ご家族で、地域で話し合ってみてください。地域でできないことはどうするかを、災害が起こる前に考えている人と、そうでない人とは被害がまったく違うということを災害地でたくさん見えてきました。すべての人の力を結集しないと乗り切れない程、最近発生している災害は、これまでの想定をはるかに超えています。(文責 村野)